

三島由紀夫

Yukio Mishima

Yukio Mishima

5の文学 5

編集Ⅱ大江健三郎／江藤淳

講談社

われらの文学 5 三島由紀夫

定価 四三〇円

昭和四一年三月一五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽町三ノ一九

電話 東京(九四二)一一一一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社



© 講談社 昭和四一年 落丁本・乱丁本はお取り替えていただきます。

目次

398	383	366	353	178	5
月	魔法瓶	憂国	橋づくし	美しい星	絹と明察

411 雨のなかの噴水

418 剣

455 私の文学―三島由紀夫

463 解説―佐伯彰一

475 略年譜

装幀―細谷巖 卷頭写真撮影―野上透

三島 由紀夫

絹と明察

第一章 駒沢善次郎の風雅

岡野が駒沢善次郎にはじめて会ったのは、昭和二十八年九月一日、京都嵐山の或る割烹旅館の朝食の席である。岡野はたまたま骨休めにここに泊っており、前夜来紡績業界の大立者の懇親会が催おされていることは知っていたが、翌朝になって、廊下で旧知の桜紡績社長村川にたまたま出会い、無理に誘われて、朝食の席に列なることになった。岡野の行動はいつも「たまたま」なのである。

広間へ入ってゆくと、駒沢は末座の主人役の席において、岡野は一見会費制の集まりのようにみえるこの懇親会が、実は駒沢の招待、それも相当無理押ししの招待によるものであることを察した。

彼を迎えた駒沢の態度が、かなり様子を繕い、かなり傲慢、かなり神経質であったことから、つまり彼に対する自然さを欠いていたことから、岡野の神速な目は、こ

の人物の正直さと履歴の浅さ、交際範囲の窄さ、それからその自己満足と不安とを一時に量った。

そのとき駒沢は満五十五歳であった。

岡野が得た駒沢の第一印象は、のちになって改められなければならない、そんなに明るいものではなかった。かつては高く仰ぎ見ていた大紡績の社長連と、こうして対等の附合をはじめると当って、駒沢はよほど緊張していたのであろう。

頭も半ば禿げ、血色のよい、どちらかというとな平凡な中年の商人タイプであるが、三角の小さな目に昔の警官のようなやや油断ならぬ光りがあり、しかも心持斜視で、これが率直に現われすぎる心の動きを隠蔽する役目をしていて、鼻梁は高からず、小鼻が甚だ怒って、口はふつうにしているもへの字に結ばれる傾きがあった。いかにも柔らかい印象を与えるのはその肌で、さまざまに辛酸の跡をとどめない滑らかな桃いろをしていた。彼の風貌から、彼の仕事の絹を連想させるものは、ただこの肌だけだったと謂ってよい。

村川社長は岡野を隣席に坐らせて、きょうの予定を話した。これから修学旅行よろしく、駒沢君に引率されて彦根まで行き、そこで駒沢紡績の工場を見学したのち、何やかやと歓迎のスケジュールがあって、大津へ戻って夕食を喰べ解散するが、それにぜひ同行しろというのであ

る。岡野は敢て駒沢の顔色も伺わずに、承諾した。すでに駒沢その人に、初対面から興味を惹かれていたのである。

今でこそこうして政財界にやたらに顔のひろい面妖な人物として通っているが、岡野もかつてはハイデッガーの学風を慕ってドイツに遊び、フライブルグ大学に学んだことがある。そのときハイデッガーは、主著「存在と時間」によって世界的名声を得てから十年を経ており、ナチスへの傾倒の度を深めていた。

帰朝する。「聖戦哲学研究所」という研究所まがいのものをひらく。少壮軍人がここに蝟集して、軍人を通じて、政治家や実業家や役人に顔が売れる。戦後たちまち、占領軍接待のためのクラブをひらく。ますます政界や財界に顔が売れる。占領がおわる。岡野は金を集めて、東京近郊にゴルフ・クラブを作つて成功した。しかしクラブにはほとんど顔を出さず、あちこちの重要人物の集まりに「招かれざる客」になって、いろんな利を得ることのほうが好きである。又、大口の融資の口利きをする。村川もそういうことで、一度岡野の世話になつたことがあるのである。

昭和二十七年の秋、政府が綿糸生産に対する操短の勸告をし、新規設備の確認打ち切りを発表する二ヵ月前に、すでに村川の耳にこの情報をもち込んで、桜紡績に

早急な設備拡張を決意させ、しかもその困難な融資のためには、いきなり大蔵省の主計局長室へ飛び込んで、局長自身に市中銀行へ電話をかけさせ、

「いいじゃないか。扱つてやれば国のためになることだから」

と口添えさせたりするのが、このとき村川の知つた岡野の遣口だった。村川は岡野に瞠目し、岡野は又これを機会に紡績産業界に徐々に興味を持った。

一方、岡野は、今もハイデッガーの新著を取り寄せて読み、何かと研鑽を怠らなかつた。一九五一年に出た「ヘルダアリンの詩の解明」を読んでからは、ハイデッガーを通じて、ヘルダアリンの詩の愛好者になつた。酔えばあの難解な「掃郷」の一節を朗唱して、並居る人を煙に巻いたりした。

一行が車をつらねて彦根へむかつた午前は、まだ夏の光りが強くて、しかも風にはすがすがしい匂いがあった。とても二百十日の日とは思われなかつた。

「二百十日を選ぶなんて、いかにも駒沢君らしいね。きつとこういう快晴にしてみせる自信があつたんだらうが」

と車中、村川は岡野に言つた。それまでは、同車の峰紡社長を憚つて、村川はわざと駒沢の噂もせず、英国女帝の戴冠式のための皇太子の外遊やら、第五次吉田内閣

がいつまで保つかという話やら、当りさわりのない話題を選んでいたのである。

しかしこの一言をきっかけにして、爆発的に、駒沢の話になった。岡野は、当然のこととは思ひながら、この二人の社長の駒沢に対する烈しい軽蔑の表現におどろいた。

工場見学のあいだ、社長たちは機械設備を熱心に見てまわり、だしぬけに専門的な質問をして、案内の重役の胆を冷やさせたりして愉しんでいたが、岡野は主として、この未曾有の高貴な来賓たちの前に、体を固くしている従業員の一一人の顔を見てまわった。男子工員のうちに二三、よく輝やく目を見た。それは単純な矜りに輝やいているのではなくて、もっと冷たい内的な光りである。『何といい工場だろう。危険の兆候まで具わっている』と岡野は酔うような気持で思った。

見学がすむと中食が出て、それから工場の棧橋へ導かれ、駒沢のもてなしの眼目がそこにあった。すなわち駒沢はこの日のために、百五十噸の遊覧船湖月丸をチャーターして、客を近江八景へ案内しようとしていたのである。

近江八景は彦根からはるか南下しなければならぬ逆路で、忙しい客を相手のこんな野暮な田舎くさい接待に

今さらおそれをなして、十人の客のうち四人までが、忘れていた約束を口実に、一行と別れて帰った。そこで、駒沢を含む六人と、供勢の十五人と、接待の芸者、板前など二十数人、あわせて五十人に足らぬ人数が、二百五十人定員の湖月丸に乗り組んだ。船が岸を離れると、駒沢は他の客の手前押し隠している落胆の色を、すでに隠しきれない様子になった。岡野はこれを見て気の毒に思ったが、そう思うのは早かった。駒沢という男が、そういう心境に陥るとそこで却って逆転する、その目ざましい実例を見せられたのである。

多少酔いも手つだって、駒沢は途方もなく陽気になった。もう仕事の話をしなさい。立板に水を流すように、歌川広重ひろしげの話をはじめた。

岡野はそのとき、船が岸を離れる際、千人余りの女子工員が整然と居並び、駒沢紡績の白絹の馬の社旗をふりかざして、

「湖畔にそびゆる絹の城……」

云々という社歌を合唱して、来賓を見送った異様な光景を思い返していたので、駒沢の大声ははじめ耳に入らなかつた。

「どないいうても広重ですわ。風景の心いうものを、ぐつとつかんでるさかい。わしは事業をしとつても、屑藪を集めてきて、こないこないしたら絹紡糸が出来よる、

こないこないしたらなんぼ儲かる、いう風に物を考えまへん。こりゃ仕組ですねん。心とちがいます。全体を見ながら、ぐつと心をつかむと、それでもう塩梅よう行きませわ。日本の風雅の道いうたら、みんなこのカンドコロを押えてるさかい、わしは古美術を見て、名所を訪れても、それさえ見のがさんかつたら、やかましい美術鑑賞やなんや言わんでも、心からじかに心に触れるもんや、と重役たちにも、言うてきかせてますんや。そんなつもりで、今日もわしの事業の、哲学いうたら何やら大袈裟にきこえるけれど、まあそんな精神を見てもらお、思うて船を仕立てましたんや。早い話が、広重の近江八景も、名所図絵の版画が、みんなよう知ってはるとおり、人口に膾炙してますけんど、わしの蒐めた肉筆にも、八景のうち、瀬田の唐橋と、堅田かたの落雁だけは、こんな真正正銘のが残ってますさかい、京都大学の松山先生もちゃんとお墨附作ってくれはって……」

これが目的だったのか、と岡野は思った。それにしても手のこんだことをしたものである。

駒沢は一流の実業家と交わるためには、自分の風流心を認めてもらう必要があると考えているらしかったが、今日集まった人たちはずっと洗練されていて、風雅と道話を一緒にするような趣味からは隔絶していた。

——今日も岡野は、そのときの駒沢が^{おれ}大童になればな

るほど孤独になり、その宝物の美術品の開陳も、通り一べんの嘆賞で報いられるだけだった有様を、思い出すことが出来る。

村川が岡野の脇を軽くつついた。美術に造詣の深い村川が、岡野に見せたかったのはこの場面だったらしい。

村川はすべての事態を悠々と愉しんでいた。彼が一度愉しもうと心に決めたら、俗悪も野卑も愉しみのたねになった。

「あなたにはいい安息日ですな」

とその意を含めて岡野が言った。

「願ってもない休日だよ」

と村川は、ロメオ・イ・フリエタの手巻の上物の葉巻を吹かしながら言った。

美術品の披露がすむと、客は船のあちこちへちりぢりになった。岡野が一人で舷側に凭れて、潮の眺めに心をさまよわせていると、この日はじめて、駒沢がむこうから岡野に近づいて来た。岡野と村川の親しさを見て、漸く駒沢にも、岡野が大事な客だということが呑み込めて来たらしいのである。

駒沢がこうして近づいて来たから、岡野のほうから口を切った。

「さっきの歓送の光景は感動的でしたね。千人あまりの女子工員が、きれいに整列して、美しい声で社歌をうた

つて……」

「よう言うてくれはった。わしも船からあれを眺めてましたら、お恥しい話やが、何やらこう目頭が熱うなりましてな」

これは、出帆の際思わず正直に見せた落胆の色を、今になってあとから言いくるめようとしているのだ、と岡野は考えた。

「そんなことで社長さんが泣かれては、社員もびっくりするでしょう」

「事業は涙や、岡野はん。わしはほんまに、わてが父親で、うちの工場で働いてるもんは、娘や息子や思うてます。父親の今日の晴れの舞台やいうことを察して、ああまで一心に、まごころこめて、社歌を歌うて、お客様を送り出す気持、これが尊いんですわ。この気持が駒沢紡績を盛り立ててきましたんや」

こんな見事な常套句の羅列は、ほとんど頼晦だとしてか考えられなかったが、駒沢が問わず語りに言った次のような言葉は、嘘とも思えなかった。

「わしは全生活を会社に捧げてます。孫子まごにのこす財産も一切なし。私有財産は、彦根の親ゆずりの小っちゃい家と、会社の株式だけで、あとは全部会社名義になってます。わしそのものが事業やさかいに、私人駒沢は、飯を喰うとるとき、風呂に入るとるとき、廁に入るととき

き、もう一つ、何やけつたいなことしとるとき、この四つだけや。ほんまにこの四つだけどす」

比良の頂きは雲に包まれて、暮雪の趣きなど見るべくもないが、

「ほら、浮御堂うきみどうが見えて来ましたやろ」

と駒沢が指さすところ、湖の兩岸が俄かに窄まる端に、幾多の細身の床下柱が、丁度かほそく白い裸の腰はらを蘆のしげみに浸したようにみえる、堅田の浮御堂の姿が見えはじめた。

*
*
*

それは日本が独立後一年たち、朝鮮戦争も終熄して、さまざまの昔懐しいものがよみがえってきた年であった。浴衣や、日本髪や、軍艦マーチや、女剣戟が、この年の街頭に再びあらわれた。

岡野は関西の旅からかえったあくる日、所用のついでに、銀座へ靴を誂えに行つた。町の賑わいに、何となく、一度たしかに味わつたことのある匂いを嗅いだ。彼の「聖戦哲学」、はじめはみんな冗談のつもりで持て囃すあいまいな思想が、いつか敵爾で權威に充ちたものになつてゆく道行。

駒沢との出会が、強い印象を残していて、それが一層そういう感じを深めるらしい。大企業のほとんどもにアメ

リカ流の経営学がしみわたった今になって、ああいう古くさい化物が生き永らえていて、ここまでのして来た実態を如実に見たあとでは。

岡野は自分を化物だと思っていた。駒沢は明らかにそうではなかった。岡野はいつでも拳銃を取り外すように、自分の思想を取り外してわきに置き、各種の金儲けに自由に身を動かしてきたが、戦争中の或る時期のように、思想と金儲けが仲好く同居していた時代のよさは忘れられなかった。ときどき穴の中から首を出して、外の空気の匂いを嗅ぐ。まだだ、もう少しの辛抱だ、と心で呟く。それでも岡野は、その時機の到来を本当には信じていないのである。

そこへ行くと駒沢は羨ましい。あの言説が韜晦でないとすれば、彼くらい幸福な人間はなかるう。駒沢においては、思想と金儲けがみごとに一致している。その思想がどんなに浪花節調で月並であろうと、それは彼の身についたものであり、その金儲けが日本の産業の帰趨にかかわるほどのものでないにしても、なお羨むに足る成功である。今、岡野の記憶のなかでは、あの日の大紡績の近代的な社長たちよりも、駒沢一人の像のほうが鮮明に見えた。

その靴屋は、まことに開放的な店で、往来の人の顔が飾窓ごしにすっかり読める。岡野は足の寸法を改めて測

ってもらい、コードバン一足とキッドの黒靴一足の型をえらび、そうしているうちに窓ごしに女と顔が合った。ひどく踵の高い草履を穿いた女二人はつかつかと男物の靴屋へ入ってきて、年嵩のほろがこう言った。

「履物屋でおデート？ 足がつくわよ」

「冗談じゃないよ。一人だよ。一匹狼が後ろ肢の寸法を測つてるところだ。ちかごろ暇なんぞね」

「ついでに尻尾の寸法も測ってもらったら？」

それから寸法の話になった。菊乃と妹芸者の楳子は、この界限へネグリジエを買いに来たのだそう。靴屋の用事がすんだ岡野は、面白がってお供を買って出た。道すがら、ネグリジエの寸法について冗談を言った。太平洋を包むほどのネグリジエなんてあるかねえ、と言ったのである。

そうすると、菊乃は、

「人ぎきのわるいこと言わないでよ。私はせいぜい琵琶湖ぐらいなんだから」

と言った。岡野は、牛蒡も筆の誤り、とか何とか品のわるい地口を言った。

ネグリジエの店へ先頭に立って入った菊乃が、サイズをたずねる店員に、涼しい顔をして、

「そうね。琵琶湖ぐらいのサイズない？」

と言ったのには、岡野も少々おどろいた。その店であ

れでもないこれでもないで三十分潰し、まだお座敷には間があるが、御飯を奢ってもらってゆっくり話したいところがあると菊乃は言い、妹芸者は馴れた様子で気を利かして先に帰った。岡野は菊乃をホテルのブルニエへ連れて行った。もう四十に手が届く菊乃は、文学芸者という渾名があつて、翻訳物の小説をやたらに読み、都合がわるくなると修道院へ入ってしまうむかしの女主人公に憧れていたが、菊乃自身は日蓮宗である。数あるお客の中で、そういう話が合うのは岡野くらいなものである。

女のためにシュリンプ・カクテルと、海亀のスूपと、舌鮮のムニエールを誂えてやり、白葡萄酒のシャブリを冷やさせると、岡野はまじめな顔になつて、

「御愁傷様」

と言つた。女はすぐ泣き出した。

菊乃はついこの間二十年ちかい関係の旦那に死に別れたのである。大亜貿易の社長で肝臓癌で死んだのだが、遺言で多少の遺産も分けてもらい、芸者をやめようと思つてゐるといふ話を岡野はきいてゐた。今日の相談事といふのはその話に決つてゐた。

岡野は芸者が洋食を喰べる姿が好きで、袖の捌きのきれいなフォークの扱いに風情を感じた。

菊乃の食事をしながらの相談事は、多少意表をつくものであつた。彼女は小金をもとでに小料理屋をひらいた

り、かたがた小唄の師匠になつたりする芸者の晩年に嫌悪を感じてゐたし、又、今さら世間に名を売るほどの芸もなく、養うべき係累もなかつた。もつと「社会の爲になることのために」働きたくなつたのである。その具体的な例として、女の社会の煩わしきは知り抜いてゐるから、この経験を活かして、どこかの会社の女子寮の寮長か、室長のような口はないか、と言ひ出した。

岡野はこういう女の四十歳の転機と称するものが、多く一時の気まぐれにすぎぬことを知つてゐた。菊乃は、文学的隱遁性のおかげで、ただ何とはなしに美衣美食に倦み、倦きたとなつたそのことが、固定観念になつたにすぎない。

一方では、岡野は、そんな女子寮の寮母の姿の下に、菊乃を描いてみることに面白味を感じた。或る夏、妙なことで、菊乃の「おかあさん」の妹というのが茅ヶ崎におり、その家で菊乃と逢つたことがある。菊乃が二三日そこへ保養に来ていたのである。これも隠退した古い芸者の家で、簾をめぐらした夏座敷に、暑苦しい金ぴかの巨大な仏壇があり、お札が長押にいっぱい貼られ、菊乃はおよそ似合わぬブリントのノー・スリーブを着て、横坐りに坐つて、団扇を使つてゐた。岡野が早速想像したのはその姿である。

すると、岡野にはよくあることだが、目前の、彫りの

ついた魚用の銀のフォークを小まめに扱う、やや末枯れた美しい芸者の姿を、急に、肉刺だらけの手をした無恰好な寮母の姿に変身させてやりたいような気がしてきた。

岡野はもともと存在の不変の形を好かなかつた。人間にしても、社会にしても、時代にしてもそうだった。グロテスクな変容が必要なのだ。むかし芸者までがモンペを穿き、役者までが国民服を着た時代、岡野はそこにナチスのような制服美も集団美も感じることができず、その代りに彼独特の感じ方で、歪められたものの風情を感じた。生産性の気のすすまぬ容認とそれから来る媚態、生産者の擬装と、それから来る一般的な気楽でこころよい、恥のない偽善の形、……そういう変容にはまことに風情があつた。

菊乃から見る岡野も亦、格別の男であつた。花柳界の客の多くが、金儲けに成功したあとで文化人を気取りたがるのに、岡野ははじめから文化人で、それが得体のしれない金儲けの世界へ、いわば「顛落」して来たのである。「この人も、私たちも、似たようなもんだわ」と、岡野を見るたびに、菊乃は漠然と、親近感を以て心に呟くことがあつた。

「どんな辛抱でもするわ」と菊乃は、白葡萄酒のグラスにダイヤの指環を軽くかち合わせ、その音の涼しさを愉しみながら、言った。「とにかく、東京から、都会から

逃げ出したいの。そうかと言って、お百姓はできないし、どこか辺鄙なところにいい会社がないかしら？」

「さっき、君、琵琶湖のサイズで、どうとかと言つたね」とふと思いついて岡野は言つた。

「冗談言つてるんじゃないわよ、私」

と菊乃は怒り出した。

「そうじゃないんだ。しかし何だつてあのとき琵琶湖を持ち出したんだ」

「知りませんよ、そんなこと」

「一寸思いついたことがあるんでね。琵琶湖のへんはどうなんだい。景色はいいし、田舎町だし、女子寮はあるし……」

「へえ、そんないい口があるの？」

と菊乃が乗ってきたので、岡野は詳しく駒沢紡績の話をした。駒沢の名は、よその土地の花柳界ではきいているが、こちらではあまりお馴染がない、と菊乃は言つた。菊乃が深い興味を以て聴くから、あのおかしな見学旅行の話を、岡野も微に入り細を穿つて物語ることに喜びを感じた。そこに登場する社長たちの名も、菊乃の知らぬ名ではなかつた。

いよいよ、堅田の浮御堂のところまで話が進むと、

「それからどうしたの？」

と菊乃は催促した。

「いやはや騒がしい風流だったよ」

と岡野は話をつづけた。

船が堅田の港に近づくと、そこにはすでに歓迎の人数があつて、駒沢紡績の白馬の旗を先頭に立て、エンジンを止めて迂り寄る湖月丸へ手を振っていた。

ここでも駒沢の威勢を見せられるのかと岡野はうんざりしたが、当の駒沢はいたって枯淡な心境でいるらしかった。自分のためによく調整された騒音なら、決して気にならない性質なのだ。

棧橋につく。左方の繁みから、浮御堂の瓦屋根が、その微妙な反りによって、四方へ白銀の反射を放っている。町長が棧橋へ出迎え、駒沢に慇懃な挨拶をし、大社長連へいちいち名刺を出して廻った。それが彼の引き連れた出迎えの人たちの央だから、棧橋はひどく混雑し、端のほうの人は落ちないように前の人の背中につかまっていた。

町長の先導で、一行は窄い堅田の町をとおって、浮御堂のほうへ歩きだしたが、彦根の芸者たちは、駒沢の前でいきびしい達しのおかげで、依然として、はしゃいでいいのか、乙に澄ましていいのかわからず、一人の若い妓が、山口紡績の社長に興がられてむしろに嬌

声をあげるのを、ただ顰蹙して眺めていた。何となく蘆におおわれた川面にかかる小橋をわたる。蘆のあいだに破船が傾き、その塗が日にきらめき、橋をわたる人の黒っぽい背広や黒のお座敷着は、袂の家の烈しいカンナや葉鶏頭の赤によく適った。

村川はやや群に離れて歩きながら、岡野に言った。

「何ていい天気だろう」

「それはどういう意味ですか」

「いや、いい天気だと言ってるだけだよ。君みたいな策士なら、すぐ雨を降らすことを考えるんだらう」

「そりやお望みなら雨乞いもやりますかね」

「それだから困る。君と話す、すぐそういう意味ありげな話になるから困る。そんな意味で言ったんじゃないよ。私としたことが、すぐ君のペースに巻き込まれるから困る」

村川の上機嫌はつづいていた。彼の葉巻、誰よりも一等仕立のよい彼の背広、学生時代には運動選手だった彼の若々しい立派な顔、いつに渝らぬ姿勢のよき、こんな自信の固まりが、何か或る物事を愉しみだす瞬間には、すばらしい晴朗な悪意がひろがった。

一方、峰紡の社長は道すがら、駒沢につかまっていた。

「私のところではほとんど絹は扱っていないが」と峰

社長は言った。「輸出の将来性は洋々たるもんですね。ヨーロッパへ行っても、アメリカへ行ってもそれを感ずる。どこへ行っても絹物をほしがらる。女ばかりじゃな。男でも、絹のワイシャツ、絹のバジヤマが、金持生活の夢なんですね。『おかいこぐるみ』という言葉は、欧米へ移ったんじゃないかありませんかね」

「わしも洋行せなあきまへんな。何せ、会社が大丈夫というところまで行かんことには、乳離れのしない子供を残して、親が洋行するようなもんで、人の道に背きますさかいにな。フランスの絹も、労働力不足やら高賃銀やらで、ええことない言うてますが、細々ながら絹を作っているのは、やがて日本だけいうことになりまっしゃろ。

こない手数のかかることは、もう西洋人はようせえへんですやろ。御本はんの真珠ぐらになれば、立派やけど、まだまだ日本人は日本独特のええもんきに気づかんと、西洋人に言われて、『そんなもんかいな。ほんなら、わいもやったら』いう癖が抜けまへん。日本人が日本のええところ目に目ざめんことには、だめですやろな。何でやろ？ こないな世界一のええ景色で、世界一のええ女子で、うるわしい人情がありながら……」

一行は軒先に午後の日ざしが当った古風な郵便局の前をとおった。まだ去らぬ燕の巢も軒にあって、乱れた藁の影を壁に映していた。その道を突き当って、左折する

と、そこがもう浮御堂である。

それは紫野大徳寺派の禅寺で、海門山満月寺と称し、十世紀のおわりに横川の僧都恵心が、湖中に一字を建立し、千体仏を安置したのにはじまる。竜宮城の門によそえた小さな楼門のところ、住職が一行を出迎えた。松の影に充ちたせまい庭先に、すぐ湖へ突き出た浮御堂へ渡る橋があった。

阿弥陀仏千体の半ばは、湖へむかつて、暗い御堂のなかに簇立ち、その欄干からは、対岸の長命寺山や、遠く近江富士を眺めることができた。湖はこの燻んだ金いろの二千の目に見張られていた。

『仏教というのは妙なもんだ』と岡野は考えていた。『慈眼で見張れば、湖上の船も人も難から救われるという考えなんだ。こんな死んだ金いろの目で』
見るということは岡野にとつて、本来、残酷さの一部だったが、

「遠くひろがる湖面には、

帆影に起る喜悅の波。

払曉の町はかなたに

今花ひらき明るみかける」

などという彼の好きなヘルダアリンの詩句も、この千体仏の暗い金の重庄、慈悲による、見ることによる湖の支配の前に置かれては、たちまち力を喪うように思われ